

介護退職ゼロ作戦の戦略

—あなたの介護体験を社会の共有財産に—

津止正敏(男性介護ネット事務局長)

どうもありがとうございました。

予定の時間を20分ほどオーバーしてお話をしました。

この「介護退職ゼロ作戦」のキャンペーンをやっているというのは、ことしの3月の男性介護ネット3周年記念イベントに高齢社会をよくする女性の会の樋口恵子先生から「介護退職ゼロ作戦」という力強いメッセージをいただいたのが縁になりました。皆様方の資料の中にも入っているかもしれませんが、「介護する人が幸せでなかったら、健康でなかったら、介護される人も幸せになりません」という、あのメッセージです。

確かに仕事を続けることができるということは介護する人もされる人も幸せに連動するのだと実感しています。私は、介護を選択して仕事をやめるということがあってもいいのだろうけども、しかし決して不本意な退職はあってはならないと思う。介護のために不本意な退職があってはならないという社会的決意ですね。同時に、在宅介護を選択しそのために離職したとしても、そのことが引き金になって貧乏になったり孤立したりすることがあってはならないという社会的決意でもあります。これらは、私たちの大事なスローガンとして生かすべきだろうなと思っています。答えがすぐ出るようなテーマでもないし、大きな社会構造に関わる極めて政治的言説でもあります。

実際に介護している方々の仕事の実態というのは、ほとんど目に見えてこない。先ほど池田さんがおっしゃったように、いろんな兆候、サインはあるのだろうけども、そのことが介護とどう結びついているのかというのは、やっぱり会社の現場では見えづらいですね。人事、労務のところで、辞表が出てきて退職後になってやっとわかったというのがほとんどでしょうね。後付で、辿っていけば、もしかしたら介護が関係しているのかもしれないねということが多くのところの実情だと思います。だからこそ私たちの知恵の働かせ所だし、私た

ちの介護体験を社会の共有財産にしていく作業が、今、必要だと考える次第です。抽象的な議論で空中戦をすることではなくて、むしろ私たち一人ひとりの介護体験を世に問うて、その個別・具体的な介護体験をもとにして議論を進めて社会化していくという作業こそが、介護退職ゼロ作戦の戦略にほかなりません。ぜひ皆さん方の体験したことひとつひとつを風化させずに、この体験を跡形もなく消し去っていくことはとても簡単でしょうけれども、そうさせずに私たちの社会の「書棚」に積み込んで残しきっていかうじゃないかと思います。

本当にきょうは最後まで御清聴いただいて、積極的な議論をいただいて、感謝申し上げます。

資料にもありますけども、11月23日、再来週ですか、もう一度、京都市南区の京都テルサという会場で「介護と仕事」「介護退職ゼロ作戦」のワークショップを予定しています。そこには、今日のような介護体験者だけでなく、行政のメンバー、企業でサポートしているメンバーも含めて議論しますので、きょうとはちょっと違った角度からの議論が始まるかもしれません。御参加いただけたらありがたいと思います。23日、何の日でしたかね、祝日ですよ。そう、「勤労感謝の日」に仕事を課題とする、非常にいいことだなと思います。「休まない」で議論していきましょう。

どうもありがとうございました。